

移住者と地域住民の共存について

- 過疎地域に学ぶ移住者と地域住民の協力の在り方とは -

香川県綾川町 金盛 友彦



1. はじめに

平成 26 年、地方創生は「増田レポート」の人口減少問題に応答する形で東京一極集中の是正と地方の人口減少の歯止めをかけ日本全体の活力向上を目的に始まった。同時にまち・ひと・しごと創生法の施行で、地方自治体は自治体独自の特色を活かした取組みを進め、地域の課題を解決する施策を展開している。令和 6 年は 10 年の節目の年であり、その評価が問われる時期でもある。

この間、都市部から地方への移住を希望する世代や、子育ての場所として地方を選択する層が一定数現れている。一方で各自治体では、自然増よりも社会増を目標とする傾向が現れはじめ、自治体間同士で人口を奪い合う新たな課題も表面化した。最近では「関係人口」という、住んでいなくても地域に関わってくれる人材を評価の対象とする傾向もあり、こちらはすでに定着しはじめている。

平成 21 年から開始された地域おこし協力隊制度は、16 年目に入り年々参加者は増加の一途をたどっている。総務省は令和 8 年度までに隊員を 10,000 人に増やす目標を掲げて

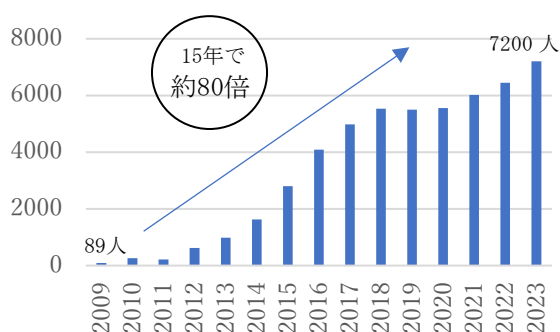


図 1：地域おこし協力隊員の人口推移
調査資料をもとに筆者作成

おり、今後も増加していくと予想される。

地域おこし協力隊制度の趣旨の一文には「人口減少や高齢化等の進行が著しい地方において、地域外の人材を積極的に誘致し、その定住・定着や地域活性化を図ることは、都市住民のニーズに応えながら、地域力の維持・強化にも資する取組であり、有効な方策と考えられる。」とあり地方創生の目的とも一致している。

ところで、受け入れ側の地方はこの流れをどう捉えているのだろうか。国や自治体の制

度に対し、地方や過疎地域で受け入れ体制は整っているのだろうか。特に過疎地域では、若い世代の流出が続き、新たに流入してくる移住者に戸惑いを感じているかもしれない。

著者は岡山県高梁市と香川県綾川町で地域おこし協力隊を経験し、現在も綾川町西分地区の大相集落に居住しながら活動をしている。隊員活動の経験から、外部から来る人に対する地域の視線には保守的な傾向があり、より丁寧で、時間をかけた関係づくりが重要であると感じている。本レポートはこうした背景から、地域住民と移住者との関係性を探り、共存へのプロセスをテーマに取り上げたい。

2. 地域住民と移住者の関係性をめぐる課題

本レポートでは地域を「地方における過疎地域に居住し、共通の生活圏や文化、価値観を共有する人々の集まり」として定義し、移住者はその地域に新たに加わる存在として位置づける。

地域では、移住者を受け入れることにより、地域の活性化や共同作業の確保として期待がされる一方、地域住民との価値観や生活習慣の違いが原因となり、摩擦が生じるケースも少なくない。昨今では、地域おこし協力隊と地域間でおきた軋轢がニュースにも取り上げられた。また、SNS が発達したことによる地域独自の文化が、誤解を招く表現で伝えられたりしている。その一方で成功事例として、移住者が移住者を呼び込み、にぎわいが生まれている地域や、人口が増加している自治体などの成功例も存在する。

過疎地域は、国土の約 6 割を占め、日本の人口の約 9%が住んでいる。総務省の調査によると、その住民の約 4 割が 65 歳以上であり、広大な面積に対して、人口減少と高齢化の進行が課題となっている。

適切に管理された山間部や農地では、美しい山村景観や四季折々の風景、農業を通じた地域の魅力が存在するが、担い手不足による耕作放棄地の増加や、鳥獣被害など農業に関わる課題も多い。現場の視点では、地域には伝統的な自治活動や文化が根付いており、住民は元気に農業に励みながら、生き生きとした生活を送っているように見える。移住者や地域おこし協力隊がこのような地域に惹かれるのは、都市では得られない生きがいや、人との繋がりを求めているためだと考えられる。しかし、地域に憧れる移住者と地域住民の間には考え方のズレがあり、その調整が課題となっている。

事項では、著者の活動地域である香川県綾川町西分地区を中心に、他の自治体の先発事例を参考に調査を進める。

3. 筆者が活動する香川県綾川町西分地区の現状分析

3-1 地域概況

香川県綾川町は県のほぼ中央に位置し、人口 22,930 人（令和 6 年 11 月現在）、面積は約 109.75 km^2 である。町の北部に位置する綾南地区は大型ショッピングモールや、スーパーマーケット、私鉄などがあり、利便性の高い地区となっている。人口が増加している一部地区もあり、県庁所在地である高松市のベッドタウンとしても近年人気を集めている。民間不動産会社が調査した令和 6 年のアンケートによると四国を対象とした「住み続けたい街」ランキングで 2 位に位置づけされている。

南部の綾上地区（綾川町の一部過疎地域）は緑豊かな自然が広がり、山林や丘陵地で形成され、その合間には田んぼが広がる中山間地域である。基幹産業である農業は米を中心にイチゴ、柿などの果樹栽培も盛んで、特に良質米の生産地として高く評価されている。

西分地区は綾川町の南西に位置し、人口は 507 人（令和 6 年）、高齢化率は 52.5%を超えている地域である。自治会は 21 地区に分かれ、加入率は町内で最も高い約 7 割を占める。地区内の小学校、保育所はともに廃校となり、JA 支店や飲食店なども閉鎖されて久しい。現在は西分公民館のみが公共施設として残っており、地域住民の交流拠点となって

いる。公民館は従来の生涯学習活動をはじめ、老人会や、各種地域団体が協議を進める場として重要な役割を果たしている。住民の多くは兼業農家として主に田んぼを営み、季節ごとの活動を行っている。

地域別構想における地域区分		
地域区分名称	地 区	小学校
昭和地域	畑田、千疋	昭和小学校
陶地域	陶	陶小学校
滝宮地域	萱原、滝宮、北	滝宮小学校
羽床地域	小野、羽床下	羽床小学校
綾上地域	粉所東、粉所西、山田上、山田下、東分、西分、羽床上、牛川	綾上小学校



図 2 綾川町の地域区分図

綾川町都市計画マスタープランから筆者編集

として、移住者を受け入れてきた。約 10 年前から継続的に利用されている空き家があり、著者はその 5 人目の居住者となっているが、これまでの居住者は定住には至っていない。著者の場合は地域おこし協力隊活動を通じて、自治会活動や空き家の改修、外部交流を進めてきた。現在は集落の有休農地保全と、地域のにぎわいづくりを目的とした任意団体を設立し、自治会活動と並行して行っている。

協力隊を受け入れてくれた当時の自治会長に話を伺ったところ、大相集落に移住者が来たきっかけは、知人からの声かけだったという。自然の中での生活を求めている家族に、「大相の空き家はどうだろう」と提案されたのが始まりだった。その後、空き家の家主と連絡を取り、最初の移住者を受け入れることになった。受け入れの際には、自治会への入会や年会費、活動内容を説明し、移住者は自治会に入会してくれた。

最初の移住者が転居した後も、移住者同士のつながりで、新たな移住者が入り、自治会への加入や共同作業にも参加してくれていた。この流れが生まれたのは、最初の移住者

綾川町は令和 2 年から地域おこし協力隊を西分地区に受入れている。(現役隊員は著者の 1 名) また、令和 6 年から綾上地区にある旧小学校単位 4 地区から地域課題の解決を目的に活性化協議会が立ち上がった。この協議会は、高齢化による自助の限界や、人口減少に伴う自治会の共助機能の低下を補い、新たな共助の担い手として運営する組織を目指している。現在は各地区 4 名の集落支援員も赴任しているほか、有志の地区担当職員がそれぞれ関わっている。

3-2 大相集落における移住者受け入れの状況

大相集落は、讃岐七富士の一つである高鉢山の麓に位置する 13 世帯の集落である。この集落では、毎月の自治会常会や年に数回の親睦会、清掃活動などが活発に行われており、地域の結びつきが強い。毎年 7 月下旬には、郷土料理のドジョウ汁を囲み地域の親睦が深められている。

大相集落では、自治会が地域の窓口と

が地域の生活や自治会の重要性を、次の移住者に伝えた事が大きいとのことだった。

子どもの通学環境も踏まえ、2～3 年で集落を離れた世帯もあったが、自治会へ加入し、顔の見える関係が築かれたことが、多様な移住者の受け入れにつながった。また、地域住民の多くが勤め人であったため、外部から来る人々に対する抵抗感が少なかったのではないかと話していた。いずれにせよ、自治会では親睦会を行う機会が多く、住民同士や移住者との交流を深めやすい土壌があったのではないかという見解だった。

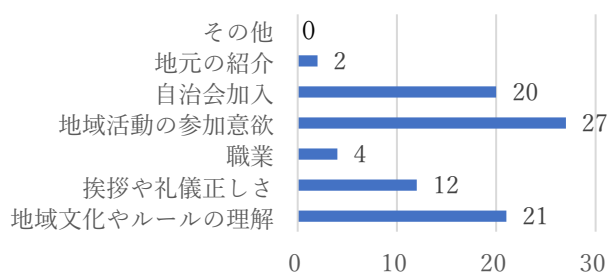
3-3 地域おこし協力隊である筆者の活動内容

筆者は西分公民館を拠点に、地域住民や地域団体を繋いでもらい、活動のサポートを行いながら地域との信頼関係を築いてきた。当初はお互いに「何をすればいいのか」、「何をしてくれるのか」という戸惑いもあったと思われるが、日々の活動を通じて、地域活動のサポートが最も喜ばれることに気付いた。特に草刈りは高齢化が進む西分地域において、重要な作業の一つであると感じられた。作業の合間には住民の本音がこぼれる場面もあり、地域の内情を学ぶ機会となった。現在では、西分地区活性化協議会の事務局を集落支援員とともに携わる関係にまで発展している。

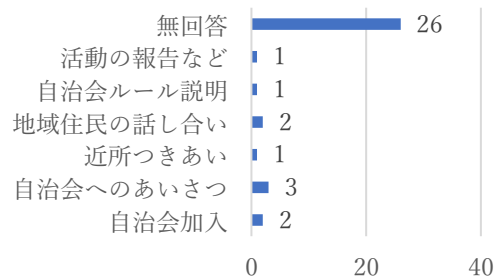
3-4 西分地区老人会を対象とした地域住民の意識調査結果

そこで、移住者を受け入れる地域住民の意識を知るために、同地区では、西分地区の住民の半数以上が高齢者を占めるため、老人会の 36 名を対象として意識調査を行った。西分地区の老人会には 60 代以上の 186 名の会員が在籍し、そのうち 43 名が公民館学級に参加し著者とも交流がある。

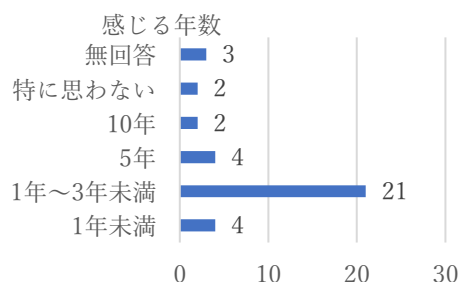
①地域に入る際に最も重要だと思う点は何だと思いますか？（3つ回答）



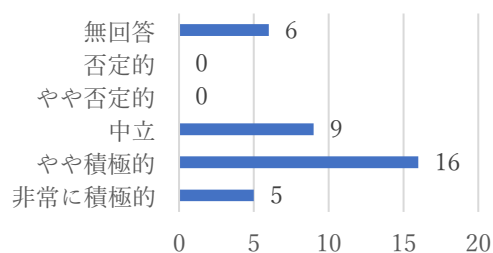
②実際に受入れの際にどのような事が行われましたか。（自由記載）



③移住者が地域に馴染んだと感じる年数



④受け入れに対する地域の意識



まず、①地域に入る際に最も重要だと思う点には「地域活動の参加意欲」(27 人)が最も高く、次いで「地域文化やルールを理解」(21 人)、「自治会加入」(20 人)の順であった。②実際に受入れの際にどのようなことが行われたかは、無回答(26 人)が高い。これは先に触れたように西分地区に移住者が定着していないからかもしれない。③移住者が地域に馴染んだと感じる年数は「1～3 年未満」が最も高く、④受け入れに対する地域の意識は「やや積極的」(16 人)が高く、ついで「中立」(9 人)「非常に積極的」(5 人)の順になっている。

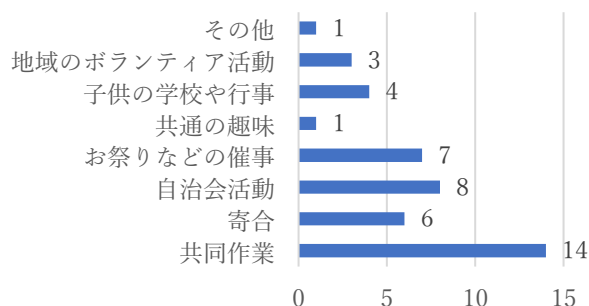
これらの結果から、西分地区は地域文化や共同作業を大切にし、自治会が中心となって地域運営を行っていると考えられる。移住者の受け入れ実績は少ないものの、一定の期間があれば馴染める土壌があることも示唆される。また、地域に入る際に「地域活動に参加する意欲」と「地域文化やルールへの理解」が特に重要視されていることから、移住者には積極的に地域活動に参加し、地域の価値観やルールを尊重する姿勢が求められている。

3-5 綾上地区全体での意識調査の結果

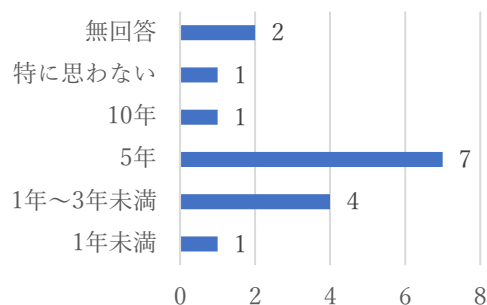
最後に、綾上地区全体を対象にした、地域の造詣に深い自治集会所役員 16 名、移住者 11 名それぞれへの調査結果を示したい。

1) 自治集会所役員の意識調査結果

①地域住民と移住者の距離が縮まると感じるきっかけについて、当てはまるものは？
(3つ選択)

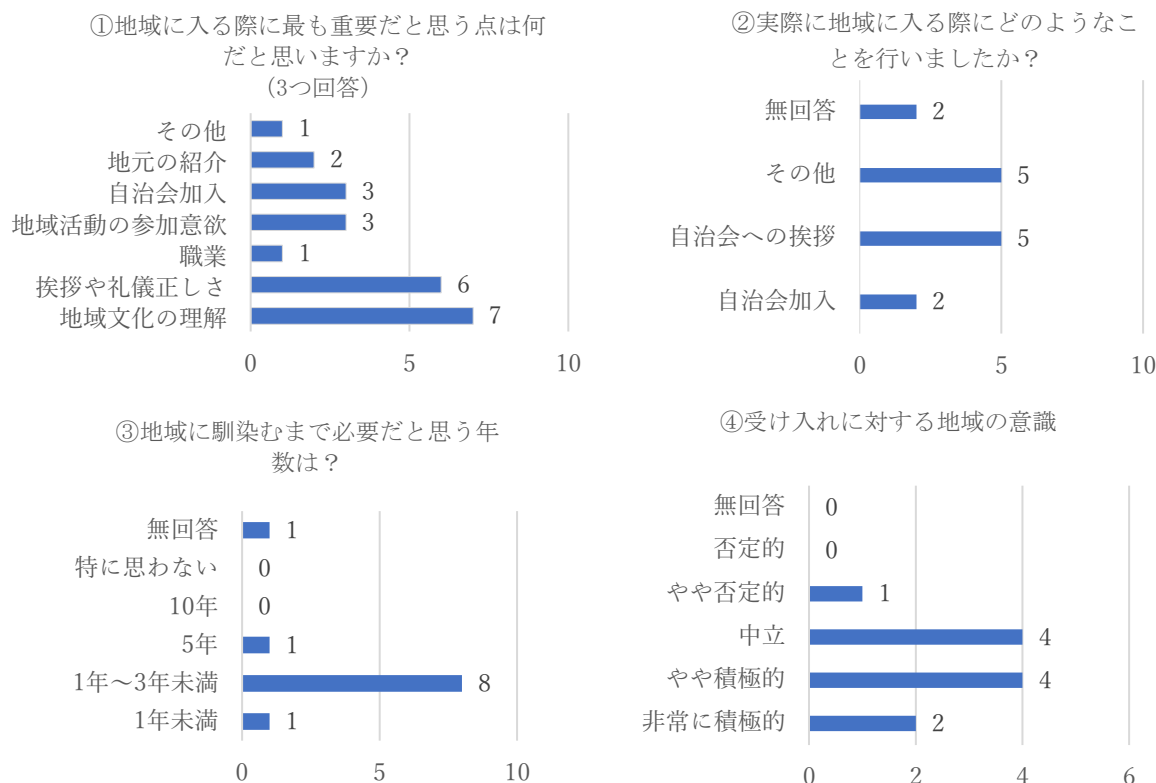


②移住者が地域に馴染むにはどれくらい年数が必要だと思いますか？



年代は 60 代 (9 人)、70 代 (6 人)、50 代 (1 人) である。①地域住民と移住者の距離が縮まると感じるきっかけについて「共同作業」(14 人)が最も高く次いで「自治会活動」(8 人)、「お祭り等の催事」(7 人)、「寄合」(6 人)の順になっている。②移住者が地域に馴染む年数は「5 年」(7 人)が最も高く、次いで「1 年～3 年未満」の順になっている。

2) 移住者の意識調査結果



年代は 30 代 (4 人) 50 代 (3 人)、40 代 (2 人) 20 代、60 代がそれぞれ 1 人ずつ。男性 9 人、女性 2 人である。地域に入る際に最も重要だと思う点には「地域文化の理解」(7 人) が最も高く、次いで「挨拶や礼儀正しさ」(6 人)、「自治会加入」と「地域活動の参加」(3 人) となっている。実際に地域に入る際に行なったことは「自治会への挨拶」(5 人) が最も高い。地域に馴染むまで必要だと思う年数は「1 年～3 年未満」(8 人) が最も高い。受け入れに対する地域の意識は「中立」(4 人)「やや積極的」(4 人) が最も高い。

以上の両者への調査結果から、地域側は移住者に対して、地域活動への積極的な関与を期待しているが、移住者は地域文化の理解や挨拶などを起点に関係を築くことを優先している。また、地域住民は移住者が長い時間をかけて馴染むことを示唆しているが、移住者は比較的短期間で受け入れられることを期待している。この双方の相違をどのように埋めるのか、移住について先進地の伊予市双海地区の事例を、次に分析したい。

4. 愛媛県伊予市双海地区における移住者受け入れの取り組みと調査結果

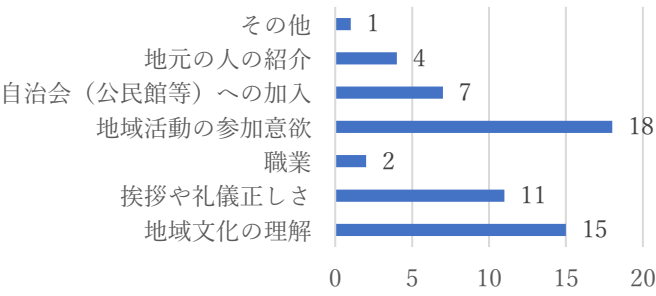
4-1 地域概況

愛媛県伊予市は、県のほぼ中央に位置し西北は瀬戸内海に面し、人口 35,183 人 (令和 6 年 11 月現在)、面積は 194.43 ㎢で市域の 70%が山地になっている。双海地区は「しずむ夕日が立ち止まる町」として長年まちづくりを展開していた場所である。伊予市として合併後も人口減少や学校の統廃合が課題になっていた。そうした中、住民主体の「まちづくり学校双海人」を発足させ、設立翌年には移住支援事業も始めた。地域の翠小学校は児童

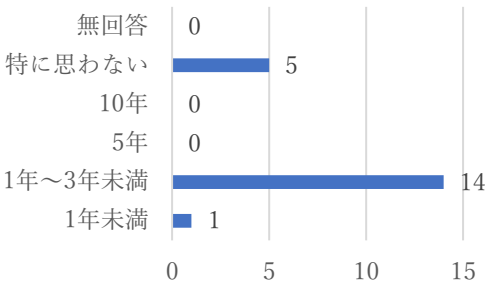
数も増加し、現在もにぎわいをみせている地域である。

4-2 地域住民 20 名の意識調査結果

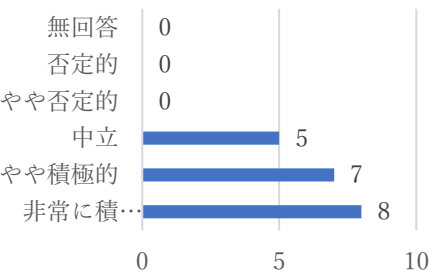
①地域に入る際に最も重要だと思う点は
何だと思いますか？（3つ回答）



②移住者が地域に馴染んだと感じる
年数



③受入れに対する地域の意識

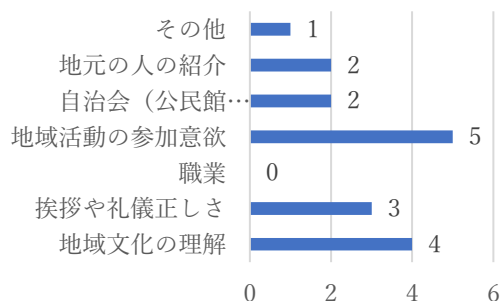


④実際に受入れの際に行われたこと（自由記載 10 件）
・ 公民館活動に誘って、参加してもらった際に挨拶や歓迎会をした。
・ 事前に常会等で来る方の情報をできるだけ多く発信した。
・ 自分達の地区の紹介と、個人個人の紹介を兼ねた懇親会を行った。
・ 地元の方を通じての紹介
・ 移住者歓迎会、公民館主催のスポーツ行事の参加、近隣住民宅にお伺いして挨拶（手土産持参）を行った。
・ 自治会で歓迎会等の実施
・ 公民館での顔合わせ
・ 公民館で地域の人に紹介を兼ねた歓迎会をした。
・ 地域自治組織での挨拶
・ 地域活動への参加案内

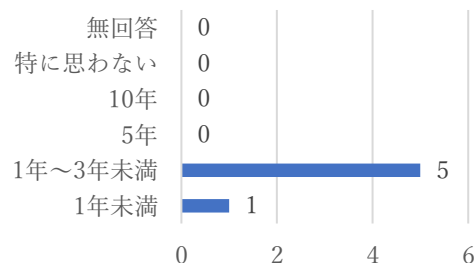
アンケートは世代別に「60 代」（8 人）、「40 代」（5 人）、「30 代」（4 人）「70 歳以上」（2 名）「30 代」（1 名）の 20 名から調査した。①地域に入る際に最も重要だと思う点は「地域活動の参加意欲」（18 人）が最も高く、次いで「地域文化の理解」（15 人）、「挨拶や礼儀正しさ」（11 人）の順となっている。②移住者が地域に馴染んだと感じる年数は、「1 年～3 年未満」（14 人）で最も高く、次いで「特に思わない」（5 人）となっている。③受け入れに対する地域の意識は「積極的」（8 人）が最も高く、「やや積極的」（7 人）、「中立」（5 人）の順となっている。

4-3 移住者 6 名の意識調査結果

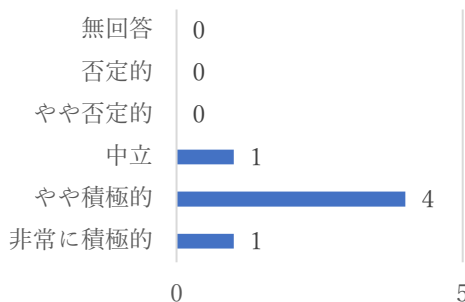
①地域に入る際に最も重要だと思うことは何だと思いますか？（3つ回答）



②地域に馴染むまで必要だと思う年数は？



③受け入れに対する地域の意識



④実際に入る際に行われた事（自由記載 6 件）

・地域おこし協力隊の方々や地域団体双海人のサポート。自治会の方々が開催してくださった歓迎会にて挨拶。
・地元の役場職員さんを通じて、住居周辺の方や区長さんなどを紹介してもらった。
・地域へのあいさつ回り
・当時の協力隊と役場の方に相談して空き家を探してもらいました。地域の受け入れ活動をしている方々にも紹介してもらったり、あちこちへの周知サポートなどをしてもらいました。
・地域団体のサポートを受けた。
・イベントへの手伝い、名前を売る、挨拶など。

①地域に入る際に最も重要だと思うことは「地域活動の参加意欲」（5 人）が最も高く、次いで「地域文化の理解」（4 人）、「挨拶や礼儀正しさ」（3 人）となっている。②地域に馴染むまで必要だと思う年数は「1 年～3 年未満」（5 人）が最も高い。③受け入れに対する地域の意識は「やや積極的」（4 人）が最も高い。地域住民と移住者、両者へのアンケート結果と比較すると、「地域活動の参加意欲」と「1 年～3 年未満」を馴染む期間と認識している点が一致しており、これらの結果から、両者の意識の差異は少ないと考えられる。

双海地区では、地域住民が主体的に移住者を受け入れ、歓迎会や地域活動への参加案内などを通じて移住者が溶け込みやすい基盤を整えている。さらに、公民館や自治会、常会といった地域組織、また地域団体「まちづくり学校双海人」を活用し、受け入れを地域全体で支援する体制が特徴的である。

5. 綾川町と伊予市双海地区の比較から見える共存のポイント

5-1 地域住民と移住者の関わり方から見た地域の類型化

綾川町と双海地区の事例を比較考察すると、地域住民と移住者の間には、地域に対する意識のズレがあることがわかる。例えば、西分地区では移住者を受け入れる意識はあるものの、双海地区と比べるとお互いを知るための交流の機会は限られている。一方で、双海地区には公民館や地域団体が交流の場を設け、お互いの顔を見知る頻度が多い。大相集

落では自治会がその役割を果たしている。

別の視点では、双海地区のアンケート調査によれば、移住者は比較的若い世代が多く、理想の子育て環境を求めていることと、地域の学校を存続させたいという住民の想いが一致している。大相集落では、田舎暮らしを希望する移住者と、自治会に加入して地域活動への協力を期待する住民の希望が重なり、両者の目的が一致している。

以上の考察から「交流の機会の程度」と「目的の合意形成」を 2 軸にとって、地域住民と移住者の関わり方から、地域の分類を試みた。(図 3)

まず、第 1 象限の「相互交流地域」とは、移住者を迎え入れる体制が整い、地域住民との交流を積極的に推進している地域を指す。このような地域では、移住者同士が繋がり、新たな移住者を呼び込む現象が起きることがある。

また、交流会やイベントが定期的開催され、移住者と地元住民との関係構築が促進されている。さらに、どのような移住者に来てもらいたいのか、地域自体に明確なビジョンや目的があることが特徴である。受け入れの環境が整っているため、移住者は安心して地域に溶け込むことができ、生活をスタートさせる不安も軽減される。

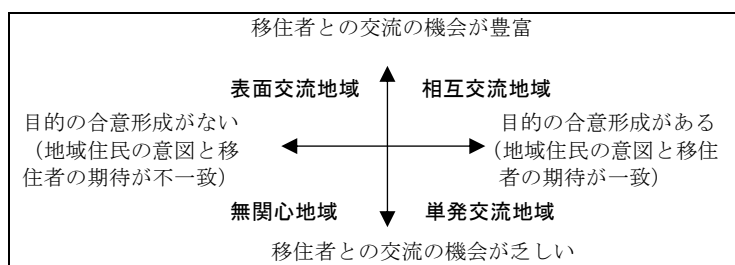


図 3 4つの地域分類

一方、地域住民や移住者のみのイベントに留まり、個々

に良い活動をしているものの、地域全体の成果につながりにくい場合は、右下の「単発交流地域」に該当する。双方の交流が不足している状況で、両者をつなぐ橋渡し役が必要になってくる。

次に、交流の場はあるものの、価値観の違いや多様性が受け入れられず協力が難しい地域は第 2 象限の「表面交流地域」に該当する。形式的な地域活動はあるが、交流が形骸化しており、時間をかけた質の高い関係構築が求められる。

左下の「無関心地域」については、移住者の存在は確認しているが、どのような人なのか情報がなく、交流のきっかけが確認できない地域である。匿名性が高く、地域住民との接点が少ないことから、都市型地域に近いともいえる。

この分類から、綾川町西分地区は、「単発交流地域」にあたると考えられ、「相互交流地域」に該当する伊予市双海地区は、目標にすべきモデルと言えよう。

5-2 地域の分類からみた提案策

それでは、どのようにすれば「相互交流地域」へと変化できるのだろうか。まず考えられるのは、移住者との交流の場をつくることであり、「単発交流地域」から「相互交流地域」に変化するアプローチがある。しかし交流の場をつくったとしても、目的が一致するまでの過程には長い時間を要するかもしれない。ここでヒントとなるのは、各地域の事例である。大相集落では、地元住民と自治会を介して両者の意思疎通を図ることができた。

双海地区では、地域団体や地元の方々が公民館などで歓迎会の場づくりを設けてくれた。

これらから「相互交流地域」には、多層的な取り組みが存在していることが分かる。第一に、自治会や公民館など既存の地域組織が交流の入口として機能している。第二に、地域住民や移住者が橋渡し役を担っている。そのためには、地域住民から信頼されるコーディネーターの存在が欠かせない。地域側の「地域の世話人」と、移住者側の「移住サポーター」の 2 層の体制がより効果的な受け入れを可能にし、移住者と地域住民の双方が互いの価値観を理解し、共存しやすい環境が生まれることが期待される。また、中立性を保ち、公平な視点を持つ行政の協力も必要であると考えられる。

6. 結論

本レポートでは、地域住民と移住者の共存をテーマにそのプロセスの解明を試みた。各地域へのインタビューとアンケート調査の結果を基に、「移住者との交流の機会の程度」と「目的の合意形成の有無」の 2 軸を設定し、地域を 4 つのタイプに分類した。この中で理想的なモデルとされる「相互交流地域」を目指すには、既存の地域団体の協力と、地域住民と移住者、双方にコーディネーターを配置し、移住者を受け入れる体制を整備することが効果的である。さらに中立的な立場から行政の協力を得る事で、より高い効果が期待される。

令和 6 年、人口戦略会議が発表した「消滅可能性自治体」のデータによれば、綾川町は消滅可能性自治体を脱却している。行政が施策を実施し、町全体として移住者を受け入れる環境づくりを進めた結果、魅力的な町として選ばれたと考えられる。しかし長期的な視点では、日々の生活において地域や近隣との関係性が、定住の重要な要素となる。地域側の「良い人に来てもらいたい」、移住者側の「近隣トラブルのない生活を送りたい」といった相互の想いが疎通しやすい地域こそ、今後選ばれる場所になるだろう。

政府の「新しい地方経済・生活環境創生本部」は、令和 6 年 12 月に地方創生の基本構想を示し、「若者や女性にも選ばれる楽しい地方の創出」を目指すことを強調している。筆者は現場の人材として、地域と移住者をつなぐ架け橋となる存在として関わっていきたい。

最後に、調査研修を進めるにあたり、ご協力いただいた綾川町地域住民の皆さま、伊予市双海地区住民の皆さまに、深く感謝を申し上げ、本レポートの結びとしたい。

【参考文献等】

- ・綾川町過疎地域持続的発展計画（令和 5 年 3 月変更）
- ・綾川町都市計画マスタープラン（令和 5 年 3 月改定）
- ・農林水産省 令和元年度食料・農業・農村白書 第 3 章 地域資源を活かした農村の振興・活性化（令和 2 年 6 月 16 日公表）
- ・総務省 地域おこし協力隊推進要綱（令和 6 年 10 月 10 日付け通知）
- ・内閣官房 地方創生 2.0「基本的な考え方」（案）（令和 6 年 12 月 24 日）

- ・敷田麻実 森重昌之 池ノ上真一 よそ者の地域定住者への変容に関する考察
(2019 年 https://www.jaist.ac.jp/fokcs/papers/9th/G4_paper_Asami_Shikida.pdf
令和 7 年 1 月 5 日確認)
- ・柳井雅也 「よそ者」による地域づくりの特徴と課題について (2017 年
https://www.tohoku-gakuin.ac.jp/research/journal/bk2017/pdf/no08_03.pdf 令和
7 年 1 月 5 日確認)
- ・青木隼人 移住者と地元住民のローカルルールに対する認識の違いに関する研究
～ 梶原町における移住者と地元住民の場合～ (2016 年 <https://www.kochi-tech.ac.jp/library/ron/pdf/2016/03/14/a1170383.pdf> 令和 7 年 1 月 5 日確認)
- ・本田恭子 伊藤浩正 小田滋晃 都市住民の農村への移住に対する中山間地住民の受け
入れ条件 - 三重県伊賀市 K 地区を事例に - (農林業問題研究第 183 号・2011 年 9 月
https://www.jstage.jst.go.jp/article/arfe/47/2/47_185/_pdf/-char/ja
令和 7 年 1 月 5 日確認)